

日本教育岩手

● 〒020-0024 盛岡市菜園1-11-15

日本教育会岩手県支部 TEL 019-623-8100

● 代表 八重樫 勝



時代に即した「創造的変革」へ

岩手県教育委員会

教育長 佐藤 博

次なる一手

2019年4月就任以来、さまざまな場面で報道等に取り上げられることが多かった。子どもたちの活躍などを伝える良い内容もあったが、県立高校再編計画・後期計画の策定に加え、事案等の発生に平身低頭、さらには新型コロナウイルス感染症対応にあわただしい日々だったというのが率直な感想である。

そのような中にあっても、学校現場の教職員と児童生徒の対応力には感心させられた。また、市町村教育委員会や関係団体、地域の方々、そして多くの教育関係者など本県教育を支える結束力の強さに助けられた思いがする。

新型コロナウイルス感染症対応では、多くの県民の皆様から一斉休業すべきとの批判も頂いた。しかし、3月の一斉休業を学校現場の努力や柔軟対応の末に乗り越え4月からの学校教育活動の再開と

学びの保障に向けた取組や支援に注力するよう心掛けた。広い県土を有する本県では一斉休業措置を採らず保健所長や市町村教育委員会と協議して部分的休業措置をとることとし、科学的知見に基づいて可能な限り学校教育活動を確保することに留意した。

7月下旬には県内でも感染者が確認されたが、児童生徒の健康・安全を最優先に迅速な対応をとることができるよう備えも強化してきた。

さらには、学びの保障を確実に行うための条件整備も随時、補正予算計上を行って進めた。例えば、今年度中に全ての県立学校に無線LAN環境を整備するほか、一部の県立学校にプロジェクト等のICT環境を拡充整備、遠隔授業や休業時の学習確保、また、県内小中学校では一人一台タブレット端末の整備が進むなど、教育環境が大きく変わっていく。私は、「不

易」の教育基盤を守りつつ、時代に即した「創造的変革」を進める機会と捉え、次なる一手を思案している。

新型コロナウイルス対策にも活きた復興教育の経験とノウハウ

「いわての復興教育」は、自然災害のみならず、様々な困難な事象への対応に関連付け、新型コロナウイルス感染症への対応にも活用することができていると考えられる。岩手には「結（ゆい）」の精神や地域ぐるみの教育振興運動など、人と人とのつながりを大切にしてきた土壌があり、また、県民一丸となって取り組んできた復興の実践で培われた一人ひとりの幸福を守り育てる姿勢がある。

これまで脈々と引き継がれてきた岩手の教育の力が、今の学校現場にも引き継がれていると確信している。

結びに代えて

郷土の先哲「無刑録」の編述者芦東山の言葉に「人心は日のごとく正実ならざるなし」の言葉がある。私は、正しきまことあらぬ人なし、に尽きると信じる。諸先生方、同僚及び部下職員諸氏の言葉を大切にして取り組んでいきたい。

いわての教育実践研究～その14～



課題解決に主体的に取り組む児童の育成

～中学校区での連携を通して～

遠野市立土淵小学校 教諭 栗澤 由紀

(公社) 日本教育会

主催の「令和元年度第十回教育実践顕彰事業」に応募した遠野市立土淵小学校の実践をまとめた論文が、見事最高賞である「会長賞」に輝きました。その論文の概要を同校栗澤由紀教諭にま

とめていただきました。

1 主題設定の理由

本校の児童は明るく素直であり、与えられた課題に対して真剣に取り組もうとする真面目な様子が見られる。過去4年間の研究の成果から、粘り強く学習に取り組む意欲の向上も見られている。しかし、学習内容を理解するために、児童全員が「分かる、分らない」を明確にし、主体的に学習しているとは言い難い。そこで、遠野市で取り組む中学校区の取組とベクトルを合わせ、能動的に学ぶ児童を育成しようとする主題を設定した。

2 具体的実践内容

本校は、4年前から算数科を中心に研究実践を重ねてきた。主体的な学習態度を育成するためには、児童、教師双方の意識改革が必要であるため、以下のような手立てを講じ、実践を積み重ねた。

(1) 中学校区ごとに連携した取組

① 授業改善に向けた2つの視点の設定

本校が所属する遠野市立遠野東中学校区では、義務教育9年間で踏まえた指導の充実を図るために、視点①「意欲を高める学習課題の設定」視点②「言葉をつなぐ全員参加型の言語活動」の2点を設定し、小学校3校中学校1校の計4校で授業実践を重ねている。

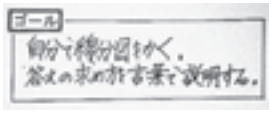
② 授業の質的向上を目指す授業交流会の実施

前述の視点を意識した日常実践について、年に2回の授業交流会を行っている。授業交流会を行うことにより、小学校の教員は、中学校への進学後、より主体的な学習ができるような指導方法の見直しに

つなげている。

(2) 教師のコーディネート工夫

① 課題解決の意欲を保障する導入の工夫(中学校区視点①)
本校では、毎時間の導入時に本のゴール(評価問題)を提示する。他の「解決方法を言葉で説明する」など論理的思考を評価できる問題も与えている。これは、単位時間内の振り返りでは、「分かった」と記述しても各種検査等の質問紙になると、積極的肯定の回答が少なくないという実態から、児童が「何ができるようになるか、分かったと言えるのか」というゴール像が理解できないことに原因があると分析したことによる実践である。



【ゴール (評価問題)】

② 主体的な学びを展開させる学習形態の設定や意図的指名

(中学校区視点②)
学習内容に合った学び合いのスタイルを教師が意図的にコーディネート

トし、設定している。

グループを設定する際も根拠を持たせて構成し、ジグソースタイルやワールドカフェスタイル(本校での学習形態の一つ)なども取り入れている。少人数であることを生かし、様々な形態で行うことができている。また、授業には、児童の思考を予想し、取り上げたい考えをまとめた「学び合い構造図」を作成してから臨む。この学び合い構造図を作成することで学び合いの形態を決定したり、意図的に指名の順序を決めたりすることができる。

③ 能動的学習を促す日常実践

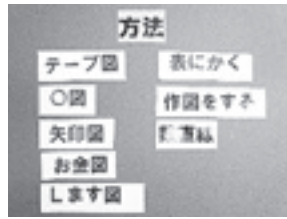
教師はファシリテーターでなければならぬが、どうしても話す量が多くなってしまうという反省が多く見られた。そのことから、単位時間内における「教師が授業で

教師が授業で使いたい言葉	
☑	〈問題を提示して〉どんな気持ちがありますか？
☑	どうすれば解決できそうですか？
☑	この見直しから課題を立てましょう。
学び合い	
☑	〇〇さんの考えの続きを言える人はいませんか？
☑	〇〇さんの考えをもっと詳しく説明してください。
☑	この考えを国で説明できる人はいませんか？
☑	もっと簡単な方法はありませんか？
☑	出された考えを比べて気持ちがありますか？
☑	なぜこの間違いをしたのか説明できますか？
☑	数字を変えて説明できる人はいませんか？
☑	学び合ったことからまとめをつくりましょう。

【教師が授業で使いたい言葉】

使いたい言葉」を示し共通理解のもと授業を展開してきた。教師の発問の仕方次第で学びの深さが決まってくる。不完全回答を完全回答にしていく過程を児童に任せることにより、児童が自分事として思考する姿が見られるようになっていく。

また、能動的な学習態度を育成するために、「算数アイテム」を常時準備している。これは学び合いの中で「児童に注目させたい、使わせたい」と考える算数用語や既習事項を洗い出したものである。学び合いの場面において児童が「算数アイテム」を活用して全体に説明する。既習事項と関連させながら自分の考えを詳しく説明することが可能になり、学び合いの活発化につながっている。



【算数アイテム (方法)】

(3) 児童の意識改革を目指す工夫

① 教師の実演による学び合いのイメージ化

児童に「目指す学び合いの姿」を明確にイメージさせるために、毎年、教師による学び合い実演を行っ

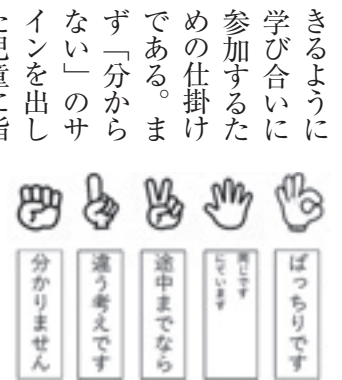


【教師実演による「学び合い」】

ている。この実演では「確実な考えを持つている児童」「途中までなら分かった児童」「自分の考えを持つことができない児童」など、実際の児童の姿を設定し、教師が児童役として全校の前で授業を行う。実演の後は、振り返りを行い、自分たちの学び合いの様子と比較して気付いたことを話す。これまで、一人が考えを発言すれば完結したと思っていた児童も「途中までしか分からないことも発表してよい」「分からないことを分らないと話してもよい」というイメージを持つことにつながっている。この実演を見ることで、児童の学び合いには深みがある。主体的な学びに近づいている。

② 児童全員が学び合いに参加できるハンドサインの活用

本校のハンドサインは、5種類である。これはすべての児童が理解で



【ハンドサイン】

きるように学び合いに参加するための仕掛けである。まず「分からない」のサインを出した児童に指名する。児童は「どの部分が分からないのか」を話し、その発言から「詳しく説明します」など他の児童が自分のできることを話して挙手していく。教師は、先に述べた学び合い構想図をもとにして意図的な指名を行うこともある。今年度からは学び合いの時間を「ON TIME AM チャレンジタイム」と名付け、制限時間内で解決することも目指している。

3 研究の成果

(1) 中学校区全体として

2つの視点に基づき実践を積み重ねたことや授業研究会を継続的に行ってきたことで、本学区の教員が同じ方向性で授業を構成することができている。視点②「言葉をつなぐ全員参加型の言語活動」の多様な提案もなされ、学区が一丸となって授業の質の向上に向けて取り組むことができた。遠野市で実施した児童の意識調査にも、2つの

視点に基づいた取組が効果的であったことが表れている。

(2) 児童の変容

教師の実演をまねるところからのスタートであったが、現在では、研究教科の算数科以外でも自分たちで考えを出し合い、高め合う姿が日常的に行われている。全校で集まる集会においても、児童の90%以上は感想や意見を述べるために挙手をするなど、学校生活全般で活発な姿が見られている。また、4月の県中学校新入生学習状況調査質問紙において、「小学校では主体的に学習していたか」に対する本校の卒業生の肯定的回答が100%であったことから、その成果の表れと言える。

4 今後の課題

本校では家庭学習として、当日の授業を思い返して理解したことをまとめる授業作文↓授業作文を根拠にした「のだから学習」(本校での学習活動の一つ)を取り入れているが、個別に課題を与えるなど、児童の能力に合わせた家庭学習の在り方もさらに工夫する必要がある。また、授業力向上のために中学校区での連携を強め、義務教育9年間の学びが充実するよう授業改善に努めていくことも継続していきたい。

新型コロナウイルス対応にみる学校・園の危機管理 (その2) 中野小学校・厨川中学校の取り組みを中心に

新型コロナウイルスの感染は緊急事態宣言解除後、首都圏で再び増加に転じ、全国に拡大している。先の見通しが立たないまま、コロナとの闘いは続く。

今年度支部事務局では各校種・園のコロナ対応についての取材を企画、今回は第2回として小・中学校を取材した。7月2日盛岡市立中野小学校、7月7日厨川中学校を訪問し、太田勝浩校長(岩手県小学校長会会長)、菊池正樹校長(岩手県中学校長会会長)のお二人にその取り組み状況等を伺った。

中野小学校の取り組み

【3月の休校措置】行事は3密を避けて実施

2月末の政府の臨時休校要請により、盛岡市でも3月4日から臨時休校に入った。3月は学校にとって、一年間の節目の時期であり、子どもたちは卒業式や修了式、離任式といった行事等とおして大きく成長する大切な時期である。



取材に応える太田校長

政府の要請は急遽行われたため準備期間は二、三日しかなかったが、休校期間中の課題を準備し、学習や家庭における生活上の留意点を指導して休校に入った。行事は市の指針に基づき、卒業式は密閉、密集、密接の所謂「3密」を避ける等の感染防止対策を講じながら実施された。修了式は校長講話を校内放送で学級毎に行った。しかし、離任式は何も行いうことができず、子どもたちは離任の職員にお別れもできないまま新学期を迎えることとなった。

春休み中、教職員はコロナ対応

に即した新年度計画・準備に追われることになる。

【新年度学校再開】新しい生活様式の徹底を図る

新年度は臨時休校期間、春休みを挟んで約一カ月ぶりの再開となった。感染者ゼロの岩手県ではほとんどの学校で、ほぼ例年どおり4月上旬に始業式、入学式が行われた。もちろん、3月同様感染防止対策を取ったうえでの実施である。

新年度の教育課程編成は様々な変更を余儀なくされた。コロナ対応のため、「新しい生活様式」での学校生活がスタート。日常における登校時の検温結果の確認と健康観察、マスクの着用、手洗いの徹底、職員による下校後の教室・トイレ等の消毒作業等々の習慣化を図った。また、各種行事は感染の収束が見通せない中で実施することは難しく、県や市の指針に基づきながら、一学期は授業中心の教育課程を組み、行事はできるだけ二学期に延期するか、または中

止することとした。そのため、運動会、学習発表会、修学旅行等行事が二学期に集中することになり、行事内容の吟味や新たな発想での行事計画の練り直しが必要であった。

さらに、同校では全学年において「コロナについての学習」の授業を行い、コロナによって変わった学校生活、学習活動についての理解を深めた。

【危機を越えて】想像力を働かせることが大切

コロナによって失われたものは多い。しかし、こうした危機的状况から得られたものも少なくはない。

3月、子どもたちは約一カ月学校から遠ざかっていた。そのため、



登校時の検温の様子

学校再開を待ちわび、学習したいという思いに駆られる子どもも多かったようである。子どもたちのハングリー精神がよい方向に作用した。また、今次のコロナ対応は「教育課程を見直すきっかけ」ともなり、子どもの姿を考えながらさまざまなアイデアを出し合い、あらためてそれぞれの教育活動の意義等を考えることにつながった。

太田校長は「想定外のこととは起こるけれども、想像力を働かせてできるだけ想定外を減らしていく。そして、教師自ら判断し行動することができるよう志向する。そういったことがこれからは特に大事になってくる」と話す。危機から学ぶことは多い。

厨川中学校の取り組み

【コロナ対応による変化と教育活動が一変】

中学校においても、3月の休校措置、4月の学校再開と、小学校と同じような対応に追われた。

新年度、再開した学校の教育活動や生活は一変する。全校朝会を放送で行ったり、年度初め4月に行う対面式や応援歌練習は従来と形を変えて実施したりした。授業



取材に応える菊池校長

も話し合い活動等は制約され、行事は一学期に行っていた学習旅行、体育祭を二学期に延期した。二学期は行事が集中するので、体育祭は種目を限定しての半日開催、学習旅行も行き先を変更したり、日程を短縮したりして実施する予定である。

部活動は「3密」等避け、さまざまな制約はあるものの、通常に近い形で活動している。しかし、部活動の大きな目標となる県中学校総合体育大会は中止することとなった。ただ、地区大会は各地区の中学校体育連盟に判断が委ねられ、結果的に全地区で何らかの代替大会が行われた。三年生にとって部活の集大成の場が確保された

意義は大きい。文化部も、県中学校総合文化祭展示部門は行われる予定であり、盛岡・紫波地区中文連総合発表会は吹奏楽部、合唱部の発表を実施する方向で検討されている。

日常生活においては手洗いの徹底、マスクの着用が習慣となり、授業中の換気や送風もまめに行う。同校では校舎の朝の開錠を7時半から7時45分にした。登校時の検温確認や健康観察等々に指導が必要となるため、勤務時間を考慮してのことである。

【変わった意識と変化に柔軟に対応】

コロナ対応を通し、教職員の意識も大きく変わった。意見、アイデアを出し合い、方向性が決まれば後は一致して事にあたる。こうしたことは普段も当然必要なことではあるが、危機の時にあつて一層強く感じられた。

生徒たちもさまざまな変化に柔軟に対応できるようになった。厨中の伝統的応援の継承にあたっては、二・三年の応援リーダーが、密を避けながらそのためにはどうすればよいかを考え、一年生にしっかり伝えることができた。制

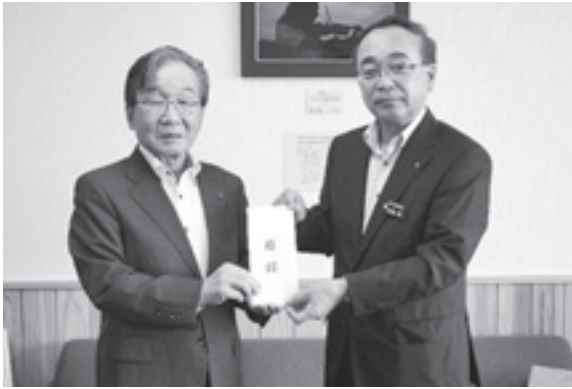
約の多い中で我慢強くもなった。コロナ対応による変化に保護者も理解を示し協力してくれた。

コロナという危機に際し、菊池校長は「多くの制約がある中で、できないからというのではなく、できない中で何ができるかを考えていくことが大切」と話す。



登校時 手洗いの様子

両校長は県小学校長会、中学校長会会長を務め、コロナ対応についても県全体への目配り、気遣いを忘れない。校長会理事会等での情報交換とおし情報共有等にも積極的に取り組んでいる。両校長のお話からは、「危機によるマイナスをどうプラスに変え、ステツプアップを図っていくか」、そういった熱い思いが強く感じられた。



佐藤博教育長に目録を贈呈する八重樫勝理事長

(公財)岩手育英奨学会へ 二百十万円助成

(一財)岩手県教育振興基金の事業

昭和六十一年に創設された「財団法人岩手県教育振興基金」は、平成二十五年四月一日付で「一般財団法人岩手県教育振興基金」として新たにスタートし、早七年目を迎えております。

「一般財団法人」の意義は、公益目的事業を実施することであり、(公財)岩手育英奨学会(遠藤洋一

会長)への助成がまさにその事業であります。

今年度は、七月十七日に育英奨学会に二百十万円を助成しました。この奨学会への助成金は、県内小・中・高・特別支援校の新任の校長と副校長の先生方、二百九名の皆様からお一人一万円のご寄付を頂戴し、基金から二万円を加えて総額二百十万円としたものです。

なお、令和元年度は四五八名の高等学校等在学が奨学生として学業に励んでおります。

創設から三十四年に亘り受け継がれてきた基金は、現在総額八千五百万円余りとなっております。この基金の運用利息を活用し、定款の目的に沿って、育英奨学会への助成の他に、「教育に関する調査研究」「教育研究団体等が行う研修事業」「伝統文化に貢献する事業」等への様々な助成活動を行っています。

◇小学校長会・中学校長会

▼盛岡地区(一名)

菊池康幸

▼岩手地区(十名)

外館邦博・佐々木寿洋・舞田一穂

菊池春夫・松本洋介・市村康之

石亀健・田村敦子・寺澤幸昌

高橋治

▼紫波地区(三名)

鷹齋達・星川明宏・坂本大

▼花巻地区(四名)

宮川琢夫・菅原秀文

近藤澄江・佐藤敦士

▼遠野地区(二名)

平芳則・関口一二

▼北上和賀地区(三名)

有馬賢・長谷川幸代

渡邊工

▼胆沢地区(三名)

菊地尚子・熊谷文彦

石川晃

▼江刺地区(六名)

小野寺吉誉・阿部智子

林博文・富田美奈子

千田昭宏・晴山光弘

▼一関西地区(七名)

藤田浩人・砂子田玲子

八木橋信也・野原勝博

吉池真・千葉芳恵・山内弘文

▼一関東地区(四名)

門屋健司・福田博美・山蔭深思

加藤建一

▼気仙地区(八名)

小石敦子・細川佳紀・菊池ゆかり

熊谷賢・佐藤克洋・大森 亘
松本祥子・岩角聖孝

▼釜石地区(四名)

堀村克利・舞良昌孝・沖館玲子

浅沼寿典

▼宮古地区(二名)

佐藤泰彦・黒澤みほ子

▼下北地区(三名)

大澤 滋・鈴木久美子・古里康彦

▼九戸地区(一四名)

照井大道・西館修治

佐藤拓史・五十嵐善彦

大内 明・佐藤竜也

梅野展和・角谷隆章

釜石由仁・吉田 悟

今西顕隆・阿部俊一

野崎祐二・勝部孝行

▼二戸地区(九名)

高畑由香里・川村憲弘

及川博文・最上 啓

早川宏昭・立柳容子

松尾葉子・白木澤敏行

工藤久尚

(計八十三名)

岩手県教育振興基金 寄附者御芳名

(敬称略)

今回は、御寄付をいただいた令和二年度新任の岩手県小学校長会と岩手県中学校長会の正会員の先生方をご紹介いたしました。ご協力賜りましたことに深く感謝申し上げます。

岩手県中学校長会会長
理事 菊池 正樹氏
(盛岡市立厨川中学校 校長)

スポット
その170

生は、校歌の一節を方針として保護者、地域から信頼される学校づくりと感化力を重視し教育のプロ意識を持った教師の育成に尽力されています。そして、本校職員はその方針のもと「率先垂範」を



意識し、我々の日常がこれからの社会を担う生徒たちの手本となるべく、共に学びながら生徒の美しい未来のために実践を積み重ねています。また、校長先生はわかる喜びとできる喜びを与える授業改善の実現を図り、一人一人の生徒に寄り添う教育を推進するとともに、自己有用感の醸成と自尊感情の向上に努めています。コロナ禍の影響による不測の事態への対応の中、県中学校校長会会長という重責を担いながら、先輩教師そして人間味あふれる校長先生として信頼されています。

(副校長 廣澤正紀)

長男が小学校に入学したあとの役員決めの際、『児童1人に付き6年間の間で一度は役員を引き受けましょう』ということ言われました。20人ほどの保護者はみんなうつむき静寂の中、隣の女性がかつそり私に「あなたが委員長やるなら私も引き受ける」と。そこで「どうせなら早いうちに済

ませてしまおう…」と思い、学級委員長を引き受けました。仕方なく引き受けた役員でしたがやはり、バザーや学年レクなど、当時の学級委員の役割は結構多いように感じました。そこで、学年PTAのみんなと協力し合えないかと考え、学年のPTA全員に声を掛けて実行委員会を立



随想

PTAの輪と繋がりに地域で支える子育てを求めて

一般社団法人岩手県PTA連合会元会長 五十嵐のぶ代

(現盛岡市教育委員)

ち上げ、バザーに取り組むことを提案しました。すると当時、3クラスで90名に満たない学年でしたが、殆どの方々の協力が得られました。その時感じたことは、皆さん役員を引き受けることに抵抗があっても、子どものためなら何かしら関わりたい気持ちがあるということでした。

バザーの準備活動をしているうちに、お隣のクラスで、『足掛け騒動』が起きました。教室の机の通路をふざけて歩いていたA君が、座っていたB君の足に引っかかり転んでしまいました。A君を病院に連れて行ったA君のお母さんは「治療費だっけかかってるのにな…相手の親はどう考えているんだらう…」と思っています。

ほどなくバザーの実行委員会が開かれ、A君B君のお母さんが顔を合わせるようになりました。二人は出会って間もなく、お互い『足掛け騒動』の当事者と知らず和やかに談笑しながら作業をしていました。そこで、私はあえてお二人それぞれを紹介したところ「あなたのお子さんだったんだ！大げさに捉えていてごめん

ね」と…。『足掛け騒動』は無事解決しました。それは私がPTAの輪と繋がりを感じた瞬間でした。因みにこの学年のその後の役員決めは、6年間スムーズでした。

最初は嫌々ながら引き受けた役員でしたが、それ以降は周りにもどんどんPTAを推奨しました。中には障害を持っておられる保護者の方もいたり、生活サイクルが周りと異なるご家庭もありました。子どもは自分の親が学校に関わることが嬉しいものです。「名前を連ねるだけでも子どもの安心安全のためになるので」と、無理のない範囲でご協力いただけ

る方法をお願いしてきました。PTAの目的の原点は地域の中で保護者と子どもの顔がそれぞれ見える関係にあることだと思えます。それぞれが深い関係を持つ必要はありません。地域の中で「あの子の家はここだ、お母さんはこの人だ」、それだけで子どもたちの健全育成に繋がることはたくさんあります。多少煩わしいかも知れませんが、子育ての環境だと思っ引き受けてくださるよういつもお願いしてきました。

PTAは保護者と先生方で組織された、子どもをバックアップし学校を応援する会だと思っっています。これからも、岩手で暮らす子どもたちの幸せのために、皆さんで手を携えていきましょう。

地域の財産を生かした学習活動

釜石市立栗林小学校 校長 舞良 昌孝



本校は、釜石市の北西部に位置し、鶴住居地区からさらに内陸部に入った山間部にある児童数四十二名の小規模校である。地域は、大きく三つに分かれ、北から橋野地区、沢田地区、砂子畑地区となる。

地域には、世界文化遺産となった「橋野鉄鉱山」があり、地域には製鉄と結びつきのある史跡が数多い。また、三閉伊一揆の中心人物である三浦命助の生家や閉伊街道等の基礎を開いた鞭牛和尚が住職を務めた林曹寺等もあり、歴史的にも由緒ある地域となっている。本校の地域に根差した学習活動を二つ紹介する。

一つ目は、地域材を活用した学習活動である。ここ数年この地域性を生かし、五・六年の総合的な学習の時間において、「鐵」や「地域に尽くした人」を学習材として取り上げている。一昨年度は、「鐵」をテーマにし、学区内にある「橋野高炉跡」を見学したほか、「釜石鉄の歴史館」や「旧大橋鉱山事務所」等を見学し学習を進めた。昨年度は、「三浦命助」をテーマとし、インターネットや資料による学習だけでなく、その生家を訪れ、子孫の方から話を聞き、三閉伊一揆を劇としてまとめ、学習発表会で発表している。地域の学習材を生かしての「総合的な学習の時間」は、探究活動を行う力の育成だけではなく、地域を知り、地域を愛する心を育成するとともに先達の生き方と自らの生き方を重ねるよい機会となっている。

二つ目は、郷土芸能の伝承活動である。本校は、三つの学区すべてに、いくつかの伝統芸能が伝えられている。地域にとって子どもたちはその伝承を担う貴重な存在である。毎年、運動会前に各地区で、子どもたちは地域の方々に伝



三閉伊一揆を熱演する子どもたち

統芸能を手取り足取りで指導していただいている。そして、五月に行われる運動会では、すべての地区からの郷土芸能が披露され、運動会の目玉の一つとなっている。これらの活動は、本年度「コロナウイルス感染予防」のため実施が難しい状況にあるが、子どもたちが地域との結びつきを強め、社会人としての素地を養う重要な機会として、来年度以降続けていくよう配慮していきたい。(櫻)

山寺の鐘

▼コロナ関連のニュースが、連日トップニュースとして報じられている。終息の

光が見えない日が続く中、ストレスがたまっている人も多いのではないか。頭の中もどうかかなりそうである。▼教育界にとっても、これまで経験したことのない出来事であり、先生方のご苦労は想像に余りある。全国一斉の「臨時休校」により、年度末のまとめが十分にできないまま卒業式や修了式が行われた。新年度のスタートも出鼻を挫かれた恰好になった。▼しかし、学校が再開されることになった時の子どもたちの声は、教育関係者を元気づけるものであった。「早く学校に行きたい」「みんなといっしょに勉強したい」「先生に会いたい」岩手の子どもたちは学校が好きなのだ。勉強がしたいのだ。▼岩手の教育には、あの3・11を乗り越えた実績がある。パワーがある。学校が好きな子どもたちのためにも、コロナに負けない岩手の教育を強く推し進めたい。(櫻)